革新県政の構築を

開かれた県政へ「県民の集い」

県民参加の開かれた県政を推進する奥田県政を支えていく「県民の集い」が6月17日、2,500人が参加して「博多スターレン展示会会場」で開かれました。

奥田八二知事が出席して開会された「第一回県民の集い」は、第一部の小野明社会党県本部委員長の開会あいさつではじまり、主催者を代表して内田一郎県民の会代表代理が「奥田県政一年の歩み」について述べ、岩崎隆次郎常任幹事（福岡県評事務局長）が「革新県政の歩み」を報告、続いて奥田知事があいさつしました。

このあと、具島兼三郎前県民の会代表が奥田知事の反動攻撃に屈しない人柄などにふれ、激励しながら革新県政のあり方などについて記念講演し、田中昭治共産党県委員長の閉会あいさつで締めくくられました。

この集会には三池労組、主婦会からも代表が参加しました。

三池炭鉱の歴史の中から

米騒動と三池争議

その三 第七回

十六分会 武松輝男

「昔の話バッテン、万田坑にまずしい格好バした老婆が訪ねて行ったげなですたい。そしたら応対に出た守衛がですナ、こげんとこにアンタんごたる年寄りが来るとこじゃなか、はよう帰ンなはれテ言うて追い返したゲナ。老婆はですナ、一たん帰りかけたバッテンまた思い返して万田坑の門に行ったゲナ。そしたら、こんどは違う守衛が応対に出たゲナ。そして訪ねる相手がようわからんもんで、事務所に連れていくとわかるかも知れんと言うて事務所に連れていくと、それがあんた、坑長のおっかさんじゃったげなですたい。

それからが大ごとになって、最初に応対した守衛は、その日のうちに首バ切られたゲナ」

ゲナゲナ話は何とかと言うが、と言うと、三池炭鉱の歴史好きのその老人は、これはほんとの話と言ってキッとなった。そういう茶化すようなことは言う必要もなかったのだが、そのときは、ああそうな、というだけで終わった。

いま考えると、三池炭鉱の裏面史を支えていた真髄を、ゲナゲナ話の中で教えてもらっていたことであったのだと思っている。それは具体的な形で、会社に反抗しなくても、そういう反抗の心情を持っていると判断されただけで、それが処分の対象になるということを、これほど明らさまに示した例はないだろう。

三池闘争のあと（大正十三年の同盟罷業を三池争議、昭和三十五年のたたかいを三池闘争と呼ぶ）、就労した三池労組の組合員に向かって、信賞必罰を口にしたが、それは、会社に対する反抗の姿勢をみせている三池労組員は、たとえいかなる業績があろうと、反抗の姿勢そのものが必罰になるのだということであったのだ。

このことは、智恩社の教義、三世の因果＝過去、現在、未来からこの世は成り立っていて、現世で悪いことをすれば、その報いは未来で受けるということ＝と輪廻思想から、会社に反抗する心をもつものは罰を受けるものだという智恩社教義の再現である、と言えるのではないか。

こういう支配のための背景ができあがると、それを活用する目で見える表の支配に、何をやってもかまわないという強引さと傲慢さが生まれる。

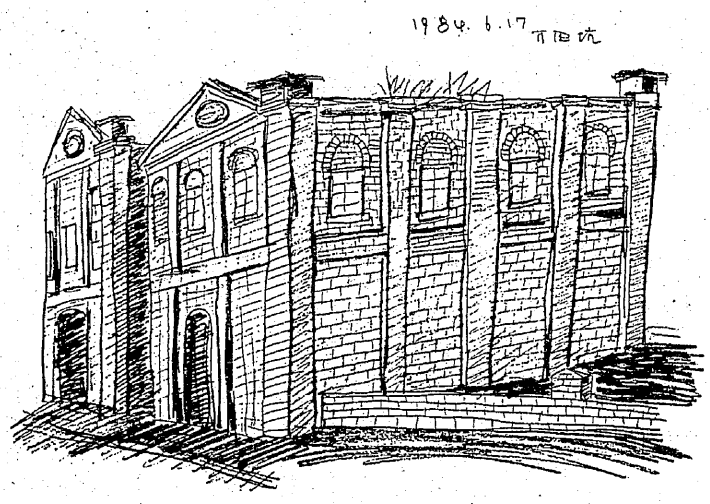
大正七年の万田坑米騒動といわれる争議も、もとをただせば万田坑での検炭（この検炭で賃金の額がきまる）をめぐっての争いからであったし、大正十三年の争議も争議収拾の雰囲気から期待された日給の引き上げが、期待をはるかに下まわったからであった。

このような、労働者にとって、生活と直接的かかわりのある検炭や賃金にもかかわらず、争議参加を逡巡したのは、会社への反抗は悪という智恩社の教えが身体内をうごめいたからであったという。

「わたしは争議には加わらんでした。弁当バ持って行くとすぐ見つかるケン弁当バ持たんで、遊びに行きよるごとして会社に出てこいテ言われたです。

そればってん、片一方じゃ会社から良か目で見らるるという気持ちもあった。しかし、片一方では賃金引き上げバすっとがほんなこつテいう気持もあったです。定約米だけじゃ足らんじゃったけんですなぁ。銭はノドから手が出るほど欲しかった。欲しかバッテン会社のために我慢するほかなかじゃっかテ思ったです。坊さんはそげんか諦めることばっかり教えとったですけん」

（カットも筆者）



許すなトマホーク ②

〝不沈空母〟も標的に

米戦略にピッタシの核兵器

巡航核ミサイル「トマホーク」は、マイクロエレクトロニクスの発達によって、はじめて可能になった精密誘導兵器（PGM）であった。トマホークは、レーダーにも映らず、命中精度も高く、しかも移動が簡単で、まるで忍者のような兵器であった。このトマホーク（海上・中発射）が、今年の六月からアジア・太平洋地域に配備される。私たちにとってそれはどのようなことを意味するだろうか。

アメリカの「国防報告」によれば、アメリカの核戦略は、「集団防衛」「核戦力の前方展開」、そして「核戦力の柔軟運用」の三つの考え方からなりたっている。集団防衛というのは、ヤスがロンに〝日本を不沈空母のように強力にして、ソ連の艦船の通峡を阻止する〟と約束したような、防衛上の役割分担のことだ。核戦力の前方展開というのは、なるべくソ連に近いところから、先制・奇襲核攻撃をかけられるようにするとともに、なるべくアメリカから遠いところで核戦争を戦おうとするものだ。そして核戦力の柔軟運用というのは、核兵器をカムチャッカ半島から中東地域までのどこへでもすみやかに移動できるようにするとともに、核兵器を戦略目標や戦術目標にたいしても使えるようにするというものだ。

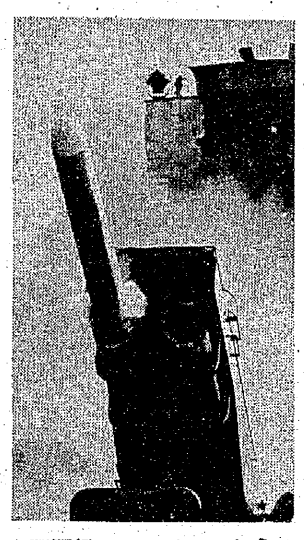
トマホークは、こうした核戦略にとって、もっともピッタリした核兵器だといえよう。事実、今年の六月からは、アメリカ第七艦隊の原潜、巡洋艦、戦艦などに、順次、トマホークが積まれることになっている。

だがこのことは、日本周辺の海が、トマホークの発射台（プラットホーム）になることを意味している。つまり、これからは、しばしば横須賀、佐世保、沖縄などの「前進基地」に、トマホークを積んだ艦船が寄港することになるのだ。そして、不沈空母ニッポン丸がこれらの核を積んだ艦船を、ソ連の艦船から守ることになるのである。

だから不沈空母は、非核三原則のあるなしにかかわらず、ソ連のSS―二〇核ミサイルの標的となる。日本は、まちがいなく戦域核の戦場となるだろう。核戦争は、私たちの身辺の問題となったのである。

『ザ・ブリテン・オブ・ザ・アトミック・サイエンティスト』誌のかかげる「審判の日の到来を示す時計」の針は、核戦争の危険が高まったことを考慮して、今年の一月から破滅の三分前にすすめられた。

私たちがこのまま手をこまねいている限り、この針は進みこそすれ、逆戻りすることはないのだ。



駆逐艦のランチャーから発射されるトマホーク

北炭はいま… ②

2＋2＝1（？）だから難しいのだ

「このヤマは昔からまとまりが良い。勉強家が多かったからだ。つけ刃ではなしに現実に即した学習を身につけていたということだろう…だが、今度ばかりは組合員の理解を得るのに苦労する。なんといっても、二に二を加えて四ということにはならないから…」

東奔西走に疲れたからだを椅子にうめて、服部委員長がそういった。

なんといっても六百八十八人の組合員の生活がかかっている。

しかし、石鉱審の今次決定が毅然として〝最後の支援〟ということを打ち出した今、運命共同体にある真谷地にとっても、これは避けて通れぬ最後のたたかいとなることはどう否定しようもない。

このヤマは昔から正直にものをいうことで知られている。だから正直にブチまけて相談し、辛い辛い多くの問題をのり越えてもらいたい。

石炭情勢、とりわけ北炭の情勢は厳しいが、真谷地ならきっと乗りきれる…と筆者は信じている。

「いや判るよ。だからぼくは今、厳しい今度の合理化をハネ返すための基本と、安全でしかも安定したヤマを残す…という一見相反する性格をもった今度の問題での、ギリギリの整合性を求めて苦しんでいるんだ…組合員に安心して働いてもらうためにね…」

× ×

このヤマは永住者が多い。陸の孤島といった地形もさることながら、なんといってもヤマ中が家族的だ。だからいままで何度も閉山、あるいはそれに近い危機に遭遇しながら根強く生き残ってきた。北炭十六山がたった三山になったのに今なお健在なのは決して偶然ではない。

がんばれ真谷地

（『北炭労連』から）

山を背に真谷地炭鉱の堅坑